

編集後記 ごんぎつね



アヴニール労務事務所 所長 柿野元博

<http://www.avenir-sr.jp>

E-Mail avenir4you@gmail.com

表紙では、伏見稲荷大社にちなんでキツネの話をしましたが、キツネを主人公にした世代を超えて読み継がれる物語があります。

小ギツネの「ごん」と兵十（ひょうじゅう）を描いた、新美南吉の『ごんぎつね』です。

我が家では、僕よりも家内のほうがこの物語を好きで、たまに読みたくなるらしく、その度購入しています。おかげで『ごんぎつね』は我が家に3、4冊あるんです。

優しい気持ちになる物語ですが、この衝動買いは、地球にも家計にもあまり優しくありませんよねー。>_<

また増える...



さて最近、「ホワイトハラスメント」という言葉を耳にするようになりました。

上司や先輩がハラスメントと受け取られることを恐れるあまり、部下や後輩への指導を控えたり、仕事を必要以上に制限したりして、成長の機会を奪ってしまうことをいいます。

転職サイトの「エン転職」が先ごろ公表したアンケート結果では、「ホワイトハラスメントによって業務が制限され、成長できないことを理由に転職を検討する」という考え方に、57%が「同意できる」「どちらかといえば同意できる」と回答しました。20代では、その割合が66%に上ります。（エン転職「第135回ホワイトハラスメントについて」より）

『ごんぎつね』は、すれ違いが生んだ悲劇の物語。いたずら好きのごんは、自分のいたずらが兵十を悲しめたことを知り、償うように栗や松茸を届けます。しかし、ごんの思いは兵十には伝わらず、兵十が気づいたのは、ごんを撃ってしまった後でした。（-_-）

僕が兵十にできること



おのれいたずら狐！



職場でも、似たようなすれ違いが起きているのかもしれない。

上司は「無理をさせたくない」「傷つけない」と考えて仕事を任せない。

部下は「期待されていない」「成長する機会がない」と感じ、意欲を失って退職する。

相手を思う気持ちがあっても、言葉にしなれば、その配慮がかえって相手を遠ざけることがあります。

疎外感

「地獄」の「獄」という字を眺めると、「けものへん」と「犬」の間に「言」があります。

言葉が通じない世の中こそ「地獄」なのかもしれません。兵十と「けもの」であるごんとの間で言葉が通じないのは仕方ありません。しかし、職場の仲間は違うはずです。

互いを思いながら理解し合えないまま、大切な人材が職場を去ってしまう。そんな悲しい結末を生まないためにも、まず相手と向き合い、その声に耳を傾けることから始めたいものです。

世の中を地獄にするもしないも、言葉というコミュニケーション次第なのではないでしょうか。



言葉の難しさについて考えていた折、9月9日プロ野球界のレジェンド・張本勲さんが亡くなりました。

張本さんは、幼い頃に右手に大きな障害を負い、さらに5歳のときに広島で被爆しました。命と向き合う壮絶な幼年・少年期を経て野球と出会い、日本プロ野球史に燦然と輝く3000本安打を記録する選手となりました。引退後は、日曜朝のテレビ番組で「喝！」「あっぱれ！」を繰り出す辛口評論でも親しまれ、時にはまたその歯に衣着せぬ言葉が批判を受けました。

特に記憶に残るのは、東京五輪の女子ボクシングで入江聖奈選手が金メダルを獲得した際のこと。

「嫁入り前のお嬢ちゃんが顔を殴り合ってね」と女性への差別や競技への侮蔑とも受け取れる発言が世間から大きな批判を浴び、番組が「不適切発言」と謝罪するという事態にまで発展しました。

しかし当の入江選手は後日、「自分がおばあちゃんになって孫がボクシングを始めるって言ったら『女の子なのにー』って絶対に言っちゃうと思います。」と笑って話し、張本さんに理解を示しました。

言葉の選び方を誤れば、相手には届かないし誤解されることもあるので、慎重になるのは当然です。

その点、炎上を招いたこの時の張本さんの言葉は、いささか配慮を欠いていたと思います。

でもその根底には親身になった優しさがありました。それは入江選手にしっかり伝わっていたのです。



数々の大記録と本音で語る姿を私たちの記憶に残した張本さん。

はばかりながら、僕も最後の「あっぱれ」を言わせてくださいね。合掌。

